

平成24年3月7日発行

静岡県 図書館協会 会報 No.61



編集・発行 静岡県図書館協会

静岡市駿河区谷田53番1号
静岡県立中央図書館内

平成23年度 第19回 静岡県図書館大会

「伝えよう図書館の力 広げよう新たな可能性」

第19回となる平成23年度の静岡県図書館大会は、10月24日(月)静岡市駿河区のグランシップを会場に、852名の参加者を集めて開催されました。

松本泰典大会運営委員会副委員長(静岡市立中央図書館長)の司会により、土屋美夫大会運営委員会委員長(沼津市立図書館長)の開会の言葉で始まり、安倍徹静岡県教育委員会教育長、谷野純夫静岡県図書館協会会長(静岡県立中央図書館長)の挨拶がありました。

続いて表彰式では、「読書県しずおか」づくりにおいて意欲的な活動が評価された学校・団体のほか、長年にわたって図書館業務に携わり功労のあった図書館職員及び熱心な活動があった優良読書グループの表彰がありました(敬称略)。

その後、日本図書館協会常務理事の西村彩枝子氏による情勢報告があり、東日本大震災による図書館の被害や現在の状況、図書館法の改正、図書館職員をめぐる動きについての説明がなされました。

午前の最後に行われたライブトークでは、「災害と図書館～その時、求められる情報サービス～」をテーマに、西村彩枝子氏をコーディネーターとし、パネリストに稲森雅夫氏(岩手県立図書館副館長)と松永憲明氏(神戸市立中央図書館)をむかえ、東日本大震災、阪神・淡路大震災での経験を基に被災者の図書館のあり方などについて意見が交わされました。

午後は、7つの分科会に分かれ、各テーマ別に様々な講演や報告等が行われました。

なお、表彰された方々は、次のとおりです。(敬称略)

☆「読書県しずおか」づくり優秀実践校・団体(者)表彰

- ・小学校の部 御殿場市立御殿場南小学校
- ・中学校の部 焼津市立焼津中学校
- ・高等学校の部 県立二俣高等学校
- ・特別支援学校の部 県立静岡北特別支援学校
- ・団体(者)の部

富士宮市市民読書サポーター (富士宮市)
ばんぶさん (長泉町)

☆全国公共図書館協議会表彰

古長谷 真由美 (三島市立図書館)
芹 澤 昭 代 (富士市立西図書館)
丹 治 雅 子 (静岡市立御幸町図書館)
佐 藤 福 子 (元吉田町立図書館協議会委員長)
朝比奈 豪 (元吉田町立図書館協議会委員)

☆静岡県図書館協会表彰

山 梨 のぞみ	(焼津市立焼津図書館)
岡 本 由紀子	(元磐田市立中央図書館)
村 松 千津子	(磐田市立福田図書館)
星 井 とし子	(磐田市立竜洋図書館)
犬 塚 力 生	(浜松市立城北図書館)
荒 熊 元 茂	(浜松市立舞阪図書館)
柴 田 悟 子	(浜松市立引佐図書館)
江 口 敏 一	(静岡大学附属図書館)
釜 田 香寿枝	(静岡大学附属図書館)
山 田 泰 子	(東海大学付属図書館沼津図書館)

☆優良読書グループ表彰

・(社)読書推進運動協議会長賞

パンの笛 (富士市) 代表 船 倉 和 江

・静岡県読書推進運動協議会長賞

ひろみ文庫 (富士市) 代表 山 田 千津子

きぶねおはなしの森 (富士宮市) 代表 小野田 真 弓

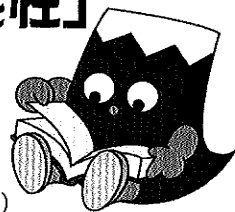
しず里おはなしの会 (静岡市) 代表 小 泉 啓 子

音訳ボランティア「サークル声」

(掛川市) 代表 柳 原 秀 子

ふくちゃんの会 (袋井市) 代表 白 井 清 子

火ようおはなし会 (長泉町) 代表 稲 葉 優 子



表彰式の様子

ライブトーク (抜粋)

西村 3月11日以降、日本図書館協会では東日本大震災対策委員会を設けました。3期に分けて活動を続け、第2期、第3期は直接支援も継続しつつ被災地の図書館が自立して再開できるための援助をするということで、間接支援のほうに軸足を移しています。現在は、本の修理ボランティアや製本ボランティア養成講座の開催、講師の派遣をしています。また、被災地図書館や支援活動の写真の貸し出しをしたり、福島県から全国各地に避難されている方たちに対して福島民報、福島民友新聞の図書館への寄贈を始めたりしたところですが、これから長く支援をしていく必要があります。最初に、お二人に震災後、被災地で利用者が図書館に求めていること等、状況をお話いただけたらと思います。

【震災後の図書館の状況】

松永 今は課題解決等、いろいろな支援が図書館業務の中にありますが、阪神・淡路大震災が起きた頃は日常で読むものを借りに来るという利用が中心でした。そのため、図書館で本を読みたい、図書館をずっと開けてほしいという要望は出てきませんでした。

地震発生後、直ちに市の災害対策本部が組織され、その中の教育委員会学校部に図書館の職員全員が組み入れられました。救援活動の運搬や避難所での相談業務の他、図書館独自の救援活動として避難所に配本をしました。また、女子の職員を中心にしてお話キャラバン隊を作り、避難所へ読み聞かせに行きました。利用者から求められた活動ではなく、神戸市としての救援活動の中で被災者に支援を行ったのです。ただ、再開に向けた準備は整ったのですが、図書館からは避難所運営支援の方へ行き人手が取れなかったため開館が遅れ、100日間閉まっていた状況が続いていました。

稲森 救援の本等、被災地とのマッチングが一部うまくいかなかったところがありました。やはり震災が起きた時には情報収集が一番大事ですが、あまりにも範囲が広すぎ、情報収集がうまくいかなかったのです。情報収集は電話よりもインターネット等が非常に役立ちました。震災時にいかに情報を収集して被災者支援に当たっていくかがということが非常に大きな課題です。

西村 被災地の図書館に対して様々な支援が行われました。支援も大きく分ければ2つあると思います。一つは県立図書館を中心とした比較的被害の少なかった周辺の図書館がどういう支援ができるかということです。もう一つは少し離れたところからの支援で、私たち日本図書館協会をはじめとして全国の図書館関係者や機関、企業がどういう支援ができるかということです。どのような支援が行われたのでしょうか。

【周辺や全国の図書館が行った支援】

稲森 岩手県立図書館は震災から1か月後から実際に市

町村訪問を始めたところ、いろいろな課題がよくわかりました。野田村立図書館については、県北の1つの地域ということで、周りの市町村もある程度一体感を持って地域を形成しているので、お互いをよく知る周りの市町村の方々から応援をいただけてきました。更に国立国会図書館の方々のご支援もいただきました。それぞれのご協力をいただきながら図書館の復旧作業を進めたということは、当館としても非常に助かりましたしありがたかったです。

松永 大阪府内の図書館の方が阪神間の被災した図書館を訪問し、状況を把握して大阪府内の図書館の皆さんに伝えたそうです。人から聞くだけでは誤った情報が伝わることもあるため、直接状況を把握した上で支援をしていただき、本当にありがたい。夜の10時に大阪を出て、神戸の中央図書館まで図書を運んでくださったので、避難所の配本に活用しました。京都市の図書館からは、本を積んだ移動図書館を派遣し、東灘区で貸し出しと回収を行っていただきました。

また、震災関連の資料を収集する際に、大阪府内の図書館の方も一緒になって研修会を開催し、何を残していくのか、どのように情報を得て資料を収集するのか検討しました。被災地の図書館の職員は復旧活動や図書館の復興に多くの手が取られていますから、震災関連の情報の収集を手伝っていただけたことが非常にありがたかったです。

【被災地の状況を考えた支援】

松永 阪神・淡路大震災の時は情報をこちらから出せないまま終わってしまいました。先ほど救援の本の話題が出ましたが、本当に必要とすることがうまく伝わりません。送られてきた本は12万冊になり、いくらかは避難所に配本しましたが図書館に溜まってしまいました。受けた方も本を整理するだけの人手を割けないのです。行政自体もまず安全や衛生に重点を置いた施策のほうにシフトをおきますので、被災した図書館、受ける側は情報を出す余裕がないのです。こんな支援をしてほしいという情報の発信と、それを受けて状況に応じた支援ができるというマッチングがうまくできればよいのですが。今回の東北の地震に関して、兵庫県立図書館はしばらく支援として本を送ることはやめたほうがいいというアドバイスをしたそうで、これは過去の経験から言えたと考えています。

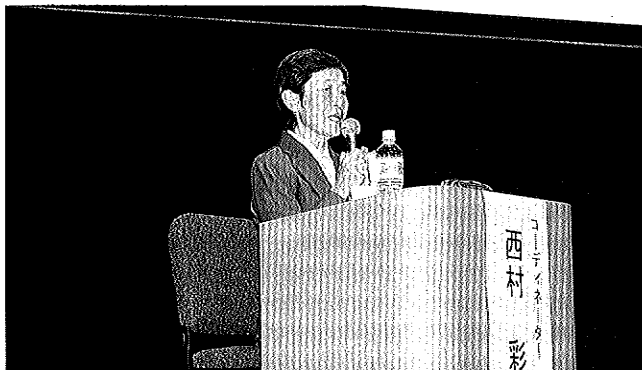
また、今回は放射能のこともあり、他府県に避難されている被災者の方も大勢おられます。神戸市立図書館では、区役所の避難者向け情報コーナーから東北3県の新聞を取り寄せて、東北3県の新聞を2か月から3か月見ることができるようになって情報提供をしました。中央図書館については全部保存するという事です。

それから、ノウハウを持った職員を派遣するというのは非常に大事です。神戸市は16年前の恩返しをしたいということで、市長が率先して職員を本当に多く派遣しています。神戸から行った職員はノウハウがあるものですから被災地でも非常にいろいろなことを聞かれるし、手助けができます。非常に感謝されて帰ってくることもありました。今回は、図書館としては何もできていないのですけれども、神戸市としては阪神・淡路大震災の経験を活かして、逆に今回の東日本の被災者の方には支援ができています。

【震災資料について】

松永 被災された方が図書館でこういった情報をほしいという声はなかなか聞けませんでした。神戸の場合は再開した時に被災者がどのような情報を必要としているか考え、区画整理、マンションの区分所有、保険金の請求の仕方などの資料を収集し、配架をしました。震災関連資料コーナーは地震後の1、2年間は非常によく閲覧もされていて、貸し出しもあったので役に立ったのではないかと考えています。

今回は、神戸市立図書館のホームページに震災関連資料



コーディネーターの西村彩枝子氏

のリストを掲載しています。これについては、救援物資、県外避難者、食事の備蓄、トイレ、避難所、ミニコミ誌、広報誌というキーワードを新たに作成して、それに関する資料にリンクを張ってすぐ見ていただけるようにしました。また、今回の原発の事故の関連では、放射能や放射線に関連する資料のリストを作成して、館内で配布したりホームページに載せたりしました。

震災関連資料の収集については、神戸の地震を後世に伝えるためということで、とにかく網羅的に集めました。ただ、避難所の一次情報である名簿や日誌については公立の図書館として提供が難しいということで、ひょうご21世紀創造協会に移管しました。同じ時期に始めた神戸大学の震災文庫についてはそうした情報も多くあります。神戸の震災関連資料収集要綱に「この震災の事実を広く伝えるとともに資料提供を通じて神戸の復興に寄与することを目的としている」と書かれています。神戸で起きた歴史的な事実を図書館として後世に伝えていくということを考えて収集を始めたのですけれども、16年間収集してきたことが今回の地震でうまく活用されたら、それこそ本当の震災関連資料の役割ではないかと感じています。

稲 森 震災関連資料コーナーを整備し、記憶の風化を防ぎたいと考えております。平成23年10月21日にこのコーナーをプレオープンしました。震災発生を機に、沿岸部の歴史等の調査研究を始めた利用が増え、被災地関連の道路地図の閲覧や複写、レファレンス件数が増加したのも特徴として挙げられます。これからの調査研究、さらには、減災教育や防災教育等に使える資料として、いかに質の高い地域性のある資料を多く集められるかが、今後我々の大きな課題ではないかと思っています。まだ、資料の数が足りません。東大の根本先生も震災関連資料コーナーをご覧になった時、中途半端に終わるのはよくないという話をされましたので、非常に責任が重いことを実感し、先進地である神戸大学さんの例を参考にしながら進めていきたいと考えています。

西 村 静岡県で災害への準備として日頃から私たちが何をしていなければいけないのか、不幸にして災害が起きてしまった時に、県内の図書館同士でどのような協力、連携をすればよいかが発言いただけますでしょうか。

【静岡県の図書館の災害への準備、対応】

稲 森 日頃の準備で一番大切なことは図書館同士の日頃のお付き合いだと思います。災害では突発的なことは必ず起きますので、普段から図書館同士で震災等の災害について対応を考えていくことが大切ではないかと考えています。それから、この震災を契機にゼロに戻り、図書館とはどんな施設なのか、どんなことをしていく必要があるのか、図書館そのものについて考える時期ではないかと考えてもいます。

沿岸の地域に近い岩手県の遠野市は、以前からこのような災害への対応を決めていて、実際、災害が起きた時に道具を持ってすぐ現場に行ったそうです。したがって、現場に行き、情報収集、共有につなげていくことが一番と考えています。また、岩手県立図書館は一部指定管理者を導入していますが、ホームページに強い職員がいたため、すぐホームページで情報を発信することができました。さらに、指定管理者の総括責任者が被災に対する図書館としての対応についての経験者であったことも大きかったです。図書館内部での話し合いの中で方針が決まり、うまく県と指定管理者とが協働で対応できたのが、このホームページに表れていたのではないかと考えています。

松 永 神戸の図書館は開館中の災害をまだ経験していませんが、避難者の誘導や災害時のマニュアルを作るだけではなくてきちんと訓練をして、体で覚えていく必要があります。また、図書館の活動としては、普段から図書館は情報を発信する場所と利用者が認識していないと地震の時に

情報を求めてくる方もいないと思うのです。

阪神・淡路大震災の時には避難所の応援に行った図書館の職員が「図書館なんか何の役にも立たんがな!」のようなことを目の前で言われたと聞いています。特に図書館に対して悪気があるわけではないので、そのように言われたことが図書館の普段の活動の反省です。あと、図書館の職員が避難者の救援活動に当たりますが、閉館していても情報発信ができる仕組みを事前に作ることができれば、地震の時にはそのような活動ができるのではないかと感じています。

災害が起ころうと本当にその場で状況をきっちり把握して、その対応を考えて動かないといけなことは出てきます。その中で情報の共有とそのマッチングというのは非常に大事です。災害後は状況把握と対応に時間がかかられず、とっさの判断で動かなければいけないことも多いのです。試行錯誤のようなことも起こりますが、何もしないよりはやってみてダメだったらすぐまた修正することが大切だと思います。

神戸も中央図書館と東灘図書館の2館だけ直営で、あとの9館は指定管理となっています。地震の時の対応について指定管理者と協定を結ぶ時に、様々なことを想定し事前に指定管理者と情報共有もしておく必要があるということです。

西 村 お二人に未来を展望するということで、被災者にとって図書館はどんな存在でありたいか等の、本が持つ力や図書館の可能性についてご発言いただけたらと思います。

【本の持つ力・図書館の可能性】

稲 森 私が感じるのは本の良さです。本は、後で何回も見ながら内容を自分のものにしていくという良さがあります。最近、電子書籍や電子図書館も話題になっていますが、紙というものは最後まで残るのではないかと考えています。また、図書館にはこれから大きな可能性があるのではないのでしょうか。今は復興に向けた原動力になるように、図書館は情報拠点として課題解決も含めた地域を支える場であるということ、それから、人との交流ができる場と考えています。岩手県立図書館としてもまだまだこれからなのですが、それを目指して着実に歩んでいきたいと考えております。

松 永 図書館の力については、情報提供は非常に大事だと思います。今回の原子力発電所の問題で風評被害がかなりあり、静岡のお茶でもあるそうです。風評被害の原因は情報がきちんと伝わらないことが非常に大きいと思うのです。情報を発信して広く伝えていくということが図書館の災害に関することや災害後の対応に関する役割かと思います。もちろん震災の関連資料を引き継ぎ、後世に残していくことも図書館がこれからも続けていかなければいけない仕事かと思います。

西 村 静岡県の方はこれからに備えるということで、今日のライブトークを一つの素材として活用していただけたら、私たちも大変うれしく思います。



パネリストの稲森雅夫氏（左）と松永憲明氏（右）

情勢報告 (抜粋)

報告者 西村 彩枝子 (日本図書館協会 常務理事)

8月に図書館法の改正があり、図書館協議会委員の任命基準を当該図書館を設置する地方公共団体の教育委員会が決めることとなりました。

2010年12月28日に、総務省から指定管理者制度の運用についての通知が出てから、日本図書館協会は全国の県立図書館のご協力をいただいて、公立図書館への指定管理者の導入状況を調査しています。2010年度までに指定管理者制度を導入した公共図書館は、全国で134自治体、273館です。今年度新たに指定管理者制度を導入したのが、13自治体20館になります。273館の内、実は73館、約1/4強が東京23区の図書館です。静岡県の場合は、導入している図書館が非常に少なく、浜松市立の中央図書館駅前分室、流通元町図書館の2館が指定管理者制度を導入しています。全国では直営に戻した図書館が6館あります。近いうちに日本図書館協会が発行している「現代の図書館」で報告をさせていただきます予定です。

現在、図書館職員の約6割が非正規雇用の人達であり、毎年その割合が大きくなっています。彼らが非常に低賃金で働かざるを得ないという状況が日常化しています。このようないわゆる「官製ワーキングプア」という状況がありながら、もう一方では司書の養成科目の単位が増えたり認定司書制度が始まったりする等、二極化している感もあります。より良い図書館サービスを提供するための職員制度をこれからも考えていきたいです。

また、2010年度には栃木県と新潟県で県立図書館不要論が出ました。栃木県はもう一度検討するそうです。私は今回の東日本大震災の際に、状況把握や支援の面で県立図書館の役割というのはとても大事だったと思っています。今後、不要論ではなく、県立図書館の役割が見直されるのではないのでしょうか。

現在、日本図書館協会は経過措置で特例社団法人となっていますが、2012年の3月までに代議員を選出し、2013年4月から公益法人としてスタートできるように準備をしています。現在の評議員の任期が2013年の3月になっていますので、うまく行けばちょうど交代できるスケジュールになっています。

分科会

第1分科会【図書館サービス】

「電子ブックの今を語る ～電子ブックで広がる世界～」

(110人参加)

講師 盛田 宏久氏 (大日本印刷(株)教育・出版流通ソリューション本部デジタル推進部部長)

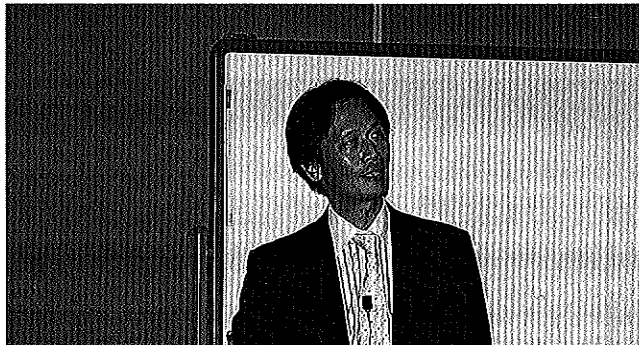
2010年が電子書籍元年とされていますが、実際には1997年ころ、PDFを使った電子新聞が登場したのが電子書籍の始まりです。2006年ころからは、携帯電話の普及に伴って、コミックを中心に売り上げが伸びました。日本では、電子書籍市場がすでに五百数十億円規模にまで成長しており、世界的に見てもずば抜けて高い数字になっています。

2015年までにすべての小中学生への配備を目指す電子教科書は、一部の小中学校で導入に向けた実証実験が始まっています。国語・算数などの反復が必要な科目よりも、理科や社会など、調べたり考えたりする授業に向いているようです。

アマゾンが日本でもKindleの発売を決めるなど、電子書籍に対する期待が高まっています。電子書籍の特徴として、在宅で購入でき、保管に場所を取らない、携帯性が高いなどがあります。その他、現物を輸送する必要がないという長所もあります。東日本大震災では、流通が止まっている間も、出版社が中心となって震災や原発関連の資料を電子書籍で無料提供していました。

「電子化すると紙の本が売れなくなる」と言う出版社がありますが、逆に電子書籍を売り出したことで紙の本が売れ始めた例もあります。電子書籍で「立ち読み」をして、気に入った本は紙で買う人がいるためです。慶應義塾大学で学生を対象に行ったアンケートでも、高くても電子版と紙の両方がほしいという結果が出ています。

アメリカでは、アマゾンが図書館利用者でKindleを所持している人を対象に、無料で電子書籍をダウンロードできるサービスを展開しています。現在進んでいる電子図書館は、数百万点を所持しているデータベースへのアクセス権を図書館が年間契約し、市民へ提供するクラウド型サービスです。その他の形態として、ベストセラーなど数年後には復本が必要なくなる本の場合、紙の本を購入すると同時に、電子書籍はタイトルごとに必要なライセンス数を年間契約し毎年契約数を減らしていく方法も考えられます。



盛田 宏久氏

第2分科会【乳幼児・児童・YAに対するサービス】

「いま、あらためて乳幼児サービスを考える
～ブックスタートの意義の確認と、
図書館の乳幼児サービスへの繋げ方について～」

(155人参加)

講師 辰巳 なお子 氏

(元浜松市立中央図書館長・元浜松市こども家庭部長)

ブックスタートが始まってから10年以上が経過し、子育て支援や乳幼児サービスの重要性が様々な部署で語られている中、浜松市において図書館長と子育て支援の担当部長を務められた辰巳なお子さんを講師に迎え、子育て支援や乳幼児サービスについてお話ししていただきました。

子どもたちが様々なメディアに囲まれている現代社会において、本は子どもの成長に力を与えるものであり、読んでもあげることによって子どもの「心と言葉」を育ててくれます。

親が子どもを見つめたり、言葉をかけたりする意識が希薄になっている現在、親に対しその大切さを知ってもらう場のひとつとしてブックスタートがあります。ブックスタートはすべての赤ちゃんを対象におこなっている事業で、普段図書館に来ない親の参加も期待できます。そこで図書館職員が絵本を読む、わらべうたを唄う、絵本の選び方などをお話しすることにより、「読み聞かせ」について親が再発見したり、図書館の乳幼児サービスに繋がったりする大きな可能性をもった事業でもあります。

特に「読み聞かせ」については、絵本さえあれば誰でもどこでもできます。子どもは、絵本を読んでもらうことにより、愛されている実感を味わい、文字が読めなくても文学を味わうことができ、その結果、心と言葉を育てる効果があります。また、読み手である大人にとっては、質の良い本を読むことにより「日本語の響きの美しさ」を味わうことで、自分自身の言葉の感覚も磨かれます。

乳幼児サービスについては図書館だけでできることには限りがあり、地域や子育て支援グループ、保育士、保健師など、子どもの周囲にいる方たちと上手に連携をとり、それぞれの専門性を生かした支援を進めることが大切であるとの言葉をいただき、やはり人と人との繋がりが大切であるということを再認識した会となりました。



辰巳 なお子 氏

第3分科会【子どもと読書】

「奥本大三郎氏講演会
～ファール昆虫記の世界～」

(262人参加)

講師 奥本 大三郎 氏

(ファール昆虫館「虫の詩人の館」館長)

「ファール昆虫記」の翻訳者としてだけではなく、作家として多くの著作があり、大阪芸術大学の教授、ファール昆虫館「虫の詩人の館」の館長でもある奥本大三郎先生を講師として迎え、「ファール昆虫記」の世界の魅力について講演をしていただきました。

「ファール昆虫記」のお話のなかでは、ファールの幼少期の生い立ちや学校の先生になってからの話など、「ファール昆虫記」を書くに至るまでの話を聞くことができました。その中で、幼少期のファールは、「光はなぜ見えるのか」不思議に思い、目を閉じて口を開け、次は、口を閉じて目を開けて、「目で見える」ということを確かめたというエピソードも聞くことができました。不思議に思ったことを自分で実験して確かめる、ファールは、幼少期からそのような少年だったそうです。また、ファールが使っていた机の写真なども会場のスクリーンでみることができました。その後、「ファール昆虫記」の中に出てくる昆虫たちの話では、どんな昆虫なのか絵や写真をスクリーンに写しながら、ご説明がありました。スカラベは、他のスカラベがふん球を運んでいると、その持ち主をはたらくことやハチの獲物が腐らないのはなぜかなど、昆虫の実態を聞くことができました。

講演のなかでは、「ファール昆虫記」のお話のほかにも、奥本先生と大学の学生との話や講義の様子、アンリ・ファール会のお話などもあり、随所に客席から笑いが起こるなど、とても楽しい時間でした。

現在は、虫と親しむような環境がないとの話がありました。子どもにどんな木が学校にあるのか聞いても答えることができないそうです。木に花が咲き、実がなり、虫が来て、鳥が来てその虫を食べるといった、自然の営みを目にする機会が減少してしまっていること、日常生活の中で、まわりを見ることの大切さが伝わってくる講演でした。



ファール昆虫記の魅力を語る奥本大三郎氏

第4分科会【図書館資料】

「見る！ 魅せる！！ 図書館資料 ～資料の見せ方・視聴覚資料について～」

(70人参加)

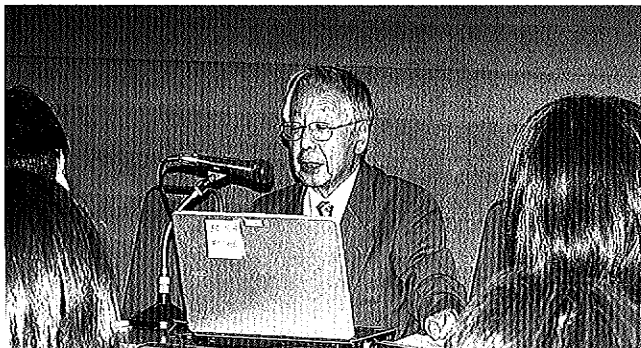
発表者 曾根 健太郎 氏 (吉見書店(株)竜南店店長)

発表者 梅原 郁三 氏 (熱海市立図書館 市史編さん室)

発表者 県図書館協会 資料専門委員

今回は、県内の図書館へのアンケートをもとに、多くの利用者に活用される資料展示の実践例が紹介されました。本と出合う場所づくりをコンセプトとした各館の事例を写真で紹介するとともに実践に活かすポイントが報告されました。社会的出来事の特集では、貸出の際の“もう1冊”になるような展示、資料を目立たせる工夫、また、タイムリーであることや過去の展示内容の記録を残すことも大切であることなどが強調されました。次に、熱海市立図書館の実践事例が発表されました。利用者の立場で工夫することが大切で、掲示展示するだけでなく、必ず説明をつけることや、館内入口に特集展示の案内掲示をすることなど、多くの利用者に見てもらえる配慮が大切であることが強調されました。次に書店の立場から、買ってもらえることを目的とした視点での事例が発表されました。多くの商品の中から商品と客をつなぐために、書店では様々な工夫が行われています。著者別やテーマ別、対象読者別に並べるなどの陳列の工夫や、店内での読み聞かせ、推薦図書の特設売り場で展開することなどが紹介されました。商品の見せ方の視点をかえるだけで、客の反応は大きく変わることが強調されました。

視聴覚資料の収集については、多くの図書館でDVD、CDを主流に収集購入しているが、視聴覚資料の収集方針を作成している館は半数であること。視聴覚資料の付録がある図書資料についても多くの館で収集購入しているが、映像資料の貸出に関して出版者の許諾を確認している館は約半数にとどまること。貸出をするための許諾の確認に当たっては、記録を残すことの大切さが強調され、115社に及ぶ出版社の現在の対応状況の一覧が示されました。汚破損についての対応方針も作成している館は約半数にとどまることなどの実態を鑑み、視聴覚資料の収集・汚破損への対応方針の入手を要望する場合は静岡県図書館協会で紹介するとの報告がありました。最後に、電子資料を収集している館は約3分の1程度にとどまることが報告されました。



梅原 郁三 氏

第5分科会【読書会】

「魅力的な読書会 ～読書会のススメ～」

(60人参加)

講師 平野 雅彦 氏 (静岡大学人文学部客員教授)

発表者 小杉 雅子 氏 (すいせんの里読書会 代表)

はじめに、浜松市積志図書館を中心に活動している「すいせんの里」読書会の小杉雅子さんに、今日までの歩みや活動内容を発表していただきました。会員は6人。昭和57年にスタートし、以来28年間402回の読書会を実施。主に市立図書館の集団読書用テキストを利用している。古い本が多いものの全員分が揃う。読書会は、自分では選ばない本も読み、新しい世界を見ることができたり、皆で読む楽しさを味わうことができたりするところに醍醐味があると話していただきました。

次に、静岡大学人文学部客員教授・東海大学短期大学部経営情報学科非常勤講師の平野雅彦さんに「読書会のススメ「読む」は呼ぶ」をテーマにお話をいただきました。

平野さんが「読書をしなければならない」と思うようになったのは、一期一会とも言えるべき、松岡正剛氏との出会いからだそうです。平野さんは、本は手に持たないと読むことができない。要は、「本を手にするきっかけをどうするかである」と言います。その工夫を凝らした平野さんの大学の研究室。例えば置いてある本を手にしなければ座ることができないソファ、冷蔵庫を開けると梶井基次郎の『檸檬』が手前に置かれている等々、多くの仕掛けが紹介されました。平野さんの柔軟で豊かな発想に感心し痛快にさえ思いました。

次に、読書会の実践事例を2つ挙げていただきました。1つは、昨年行った「本を楽しむ読書会のススメ」。3回の読書会は、調理室、図書室、茶室と場所を変えて行ったそうです。その場の力を借りることによって、読書会の中味も変わってくるという自由な読書会のあり方を教えていただきました。2つ目は、「リーディング・カフェで待ち合わせ」に挑戦した静岡大学人文学部・言語文化科の宇田雪野さんと秋枝伶子さんが実践を発表。文学で他人とつながり、声に出して読むことで、それぞれの人となり分かり、気持ち伝わり、その感動を話しました。臨場感溢れる話に読書会の新しい風を感じました。

2つの実践の中の「一冊の本を置くとフレンドリーになるきっかけ作りができる」という平野さんの言葉とリーディング・カフェを実践したふたりの「感動の波を共有できた」という言葉に改めて読書会の魅力を感じ多くのことを学んだ分科会となりました。



平野 雅彦 氏

第6分科会【学校図書館】

「学校図書館から学びを広げる ～様々な交流から生まれる学びの可能性～」

(114人参加)

講師 福田孝子氏(三郷市教育委員会 読書活動支援員)

講師 永田研氏(静岡市立末広中学校長)

はじめに、静岡市末広中学校長の永田研氏が、御自身の豊富な読書体験と本や言葉への熱い思い、そして教育における読書の意義について語られました。

永田氏は、人の生活や社会などが凝縮されている本を読むことは、直接体験を超える疑似体験を生むことさえあるとし、子どもたちが読書をする意義を説かれました。

また、永田氏は、日ごろより集会や校長室前の掲示で、タイムリーな話題を生徒に提示されています。そして、司書教諭や学校司書が、関連する本の特設コーナーを設置し、生徒が本を手に取り、学びを広げるきっかけとなるよう連携しています。永田氏のお人柄も感じられ、学校図書館や読書の魅力を再認識する講演でした。

続いて、埼玉県三郷市読書活動支援員である福田孝子氏が、読書を生涯学習の一部ととらえ、学校から広がる地域ぐるみの読書コミュニティの形成を目指している三郷市の取組について話をされました。

三郷市内の全小・中学校が、「学校図書館活用計画」に基づき①「読書を積み重ねていく」②「読書の幅を広げ、質を高めていく」③「読書したことを表現し、伝えていく」ことに取り組んでいます。現在は、③に力を入れ、読んだことを表現する多様な活動を取り入れ、授業で、学校内で、地域で、交流が広がっています。中でも、読書記録をつける、心に残ったことを書くという活動は、本を深く読む力、自分を見つめる力、コミュニケーション力を育むことにつながると話されました。学校図書館を活用して授業を充実させる方法、家庭や地域、公立図書館等と連携する方法等の具体例が多く挙げられ、参加者からは、「出来ることから始めたい」という前向きな声が聞かれました。豊かな心を育み、生涯に渡る学びを支える学校図書館の魅力と可能性を実感できる分科会となりました。



福田 孝子 氏

第7分科会【大学図書館】

「オリエンテーションをもっと魅力的に！ ～すぐできる好感度アップ企画・演出術～」

(38人参加)

講師 仁上幸治氏(帝京大学総合教育センター准教授)

図書館の印象が決まる重要なイベントであるオリエンテーションをより魅力的にするための企画・演出術を帝京大学総合教育センター准教授仁上幸治先生に講演していただきました。「現場に帰ってすぐできる」「図書館のイメージがグッと良くなる、イメージをガラリと変える」が講演のねらいです。

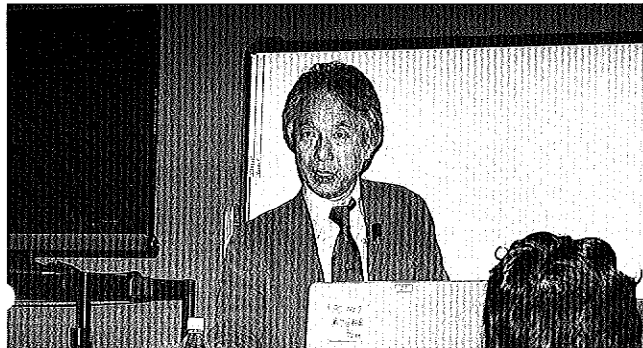
まず、仁上先生のオリエンテーションの実演からスタートしました。冒頭で自己紹介と共にスクリーンに映ったのは先生のペットのカメの動画です。これから何が始まるのだろうという期待感が高まりました。カメと遊ぶ様子からお人柄も垣間見え、動画の「興味喚起(ツカミ)」や「印象づけ」という効果を実感しました。利用説明は情報リテラシー中心に行われました。時折話題を振って会場の眠気を覚まし、マナーについては「お互いに気持ち良く使うために守りましょう。」と軽く触れる程度、最後は「図書館を利用すると情報リテラシーや調査研究の質がアップします。素敵なレポートや論文を書いてください。ご利用をお待ちしています。」という言葉で締めくくられました。先生の実演を通して、1) 驚かす、2) 対話形式、3) 旬の話題、4) ワクワク感で終わる、の4つのポイントと、「オリエンテーションは一回性のライブである。」ということを体感することができました。

実演後の日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ハンドブック(大学図書館版)』日本図書館協会、2003.3に沿った理論的なお話と、分科会の参加大学のオリエンテーションのシナリオやポスターへのアドバイスも大変参考になりました。

分科会の参加者からは、「次回から生かせるアイデアをたくさんいただいた。」「公共図書館の利用者講座でも活用できる。」などの意欲的な感想が多数寄せられました。

オリエンテーションは図書館の教育貢献度をアピールする場としても重要になっています。仁上先生が分科会で使われたパワーポイントを静岡県立中央図書館Webサイト上で公開させていただいております。ぜひ今後の参考にご覧ください。

(URL <http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/>)



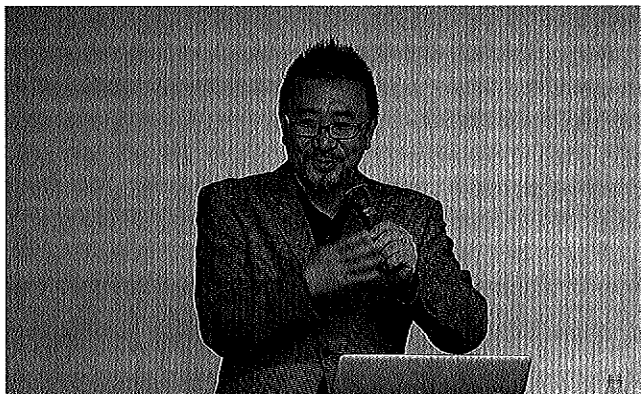
仁上 幸治 氏

平成23年度関東・甲信越静地区図書館地区別研修開催

平成23年11月29日(火)から12月2日(金)にかけて、関東・甲信越地区図書館地区別研修(文部科学省委託事業)が開催され、県内外の図書館職員や学校図書館担当者、計159人が熱心に受講されました。

今回の研修では、図書館を取り巻く環境がめまぐるしく変化する中、図書館の役割やあり方が見直されていることなどにスポットが当たりました。

基調講演では、ブックディレクター 幅允孝氏が、「セレクトよりエディット」という視点で、「本を届けたい相手が



小布施町立図書館まちとしよテラソ館長 花井裕一郎 氏

両手を伸ばして届く範囲に本を配置することが必要」と語られました。

また、小布施町立図書館長 花井裕一郎氏は、「図書館がする『おもてなし』とは、利用者の欲しい本を持ってくることではなく、その人に寄り添いお役に立つことだ」と話され、東京大学教授 根本彰氏は、大震災の被災地における図書館の状況から「地域的な情報発信の重要性」を示されました。

その他、「著作権」に関して国立国会図書館関西館主任司書 南亮一氏、「多文化サービス」に関して日本図書館協会多文化サービス委員長 村岡和彦氏の講義がありました。

演習を交えた講義としては、「ブックトーク」に関して小平市中央図書館サービス係長 渡辺房江氏が「聞き手の年齢を考えて旬の時期に出会わせたい『今読んでほしい本』を紹介してほしい」と話され、講師と受講者による実演がありました。また、「健康・医療情報サービス」に関して、静岡県立こども病院図書室医学司書 塚田薫代氏が医療情報の評価手法について話された後、横浜市中心図書館司書 加納邦子氏が、レファレンスブックについて事前課題の検討を交えて講義されました。

なお、今回は研修に合わせて東日本大震災のパネル展示や、静岡茶のサービスがありました。来年度は新潟県での開催が予定されています。

職員研修報告(公立図書館等職員研修)

※平成24年2月現在(下半期)

下半期は、主に中堅以上の図書館職員を対象に、専門的理論及び実務、運営等について資質の向上を目的とし、研修を行いました。会場を県外に求めるなど視野を広げつつ、参加者同士の情報交換も行えるよう努めました。

参加された皆さんの、真摯で積極的な姿勢が印象的でした。ご協力ありがとうございました。

(1) 専門研修

ア 図書館運営研修

期日/会場	平成23年10月5日(水) / 静岡県立中央図書館
参加人数	35人
内 容	講 義 「市立図書館における電子書籍導入の課題～鎌倉市図書館電子書籍プロジェクト実践から～」 「図書館を魅せる」 講 師 鎌倉市中央図書館 館長 古 谷 修 氏 株式会社乃村工芸社 広報部部长 コミュニケーションデザイナー 押 樋 良 樹 氏

イ レファレンス応用研修

期日/会場	平成23年11月2日(水)・10日(木) / 静岡県立中央図書館
参加人数	23人・31人(計54人)
内 容	講 義 「法情報の探し方」 演 習 「質問処理記録の作成と評価」 講 師 静岡県立中央図書館 調査課一般調査係(佐藤 れい子、高橋 健二、山田 直美、渡辺 勝)

※ 平成23年度は関東・甲信越静地区図書館地区別研修が行われたため、情報サービス研修および総合研修については未実施。

(2) 特別研修

ア 県外視察研修

期日/会場	平成23年11月9日(水) / 図書館総合展・横浜市中心図書館(神奈川県)
参加人数	24人(図書館総合展8人・横浜市中心図書館16人)
視察館特徴	図書館総合展:パシフィコ横浜にて、11月9日(水)～11日(金)にかけて開催。パネル展示や図書館政策フォーラム等を実施。 横浜市中心図書館:図書160万5476点、定期刊行物2,358種、音楽映像ライブラリー29,469点(「横浜市の図書館2011」による)という多量の資料を有し、施設は地下3階地上5階で、閲覧席734席を有する大型図書館。